

エミリ・ディキンソンと日本の花（2-3）

鵜野ひろ子

Emily Dickinson and Japanese Flowers (2-3)

UNO Hiroko

要　旨

これまでエミリ・ディキンソンの植物標本帳にある植物とペリーの日本遠征隊が採取した植物に共通にある十四種の植物について検討したが、政治家である父親エドワードが日本遠征を推進していたダニエル・ウェブスターを支持していたこと、1855年1月にそれらがワシントンに届いた直後に詩人が当地を訪れたこと、その直後に自宅に温室を造ったこと等も考慮し、特に七種は日本遠征隊の標本の一部が彼女に譲られた可能性が高いと報告した。2015年3月に再度、HUHにおいて調査した結果、HUHのウォルター・キトレッジ氏の助けで、前回は見つからなかった標本が見つかった。また植物の名前の変更等によって、ディキンソンの標本と日本遠征隊の標本とが同種だとこれまでわからなかつた植物も見つかった。その結果、共通の植物は十五種となり、日本遠征隊が採取したものでしかあり得ないと見える植物が九種に増えた。本論文では、その他の修正点を含め、その詳細を報告し、最後に全体の調査結果を纏める。また、実際に日本で植物採取をした二人の隊員の内の一人、サミュエル・ウィリアムズはアメリカンボードから中国へ派遣されていた宣教師であったので、ディキンソン家とアメリカンボードとの関係について調べた。その結果、1849年には、広東に居たウィリアムズだけでなく、ウェブスターがアメリカンボードの名誉会員であったこと、また詩人の父親が1852年に入会し、1854年には名誉会員であったこと、1855年には、新入会員のリストにエミリを含めディキンソン家の全員と、近い親戚の、計十一名の名前があること、さらに1860年以降、彼ら全員が「名誉会員」であったことが判明した。このように、アメリカンボードとの関係が深かったディキンソン家であれば、1855年にハーバード大学で標本を判定する前にその一部を手に入れることができたと言える。詩人が日本遠征隊の標本を譲り受けた可能性がさらに高まったと言えるのである。

キーワード：エミリ・ディキンソン、日本の花、植物標本、ペリーの日本遠征

Summary

In the last two papers I reported that of the fourteen species found both in Emily Dickinson's herbarium and among those collected by Perry's expedition to Japan, seven species might have been obtained directly from the expedition, considering that Dickinson visited Washington just after the specimens' arrival there in January, 1855, that her father Edward Dickinson had connections with Daniel Webster, who had promoted the expedition, and that a conservatory was built at her house in the same year.

During research at Harvard University Herbarium in 2015, another likely specimen was found with the help of Mr. Walter Kittredge. Confusion over the name of a further species was cleared up, confirming that it, too, was both in Dickinson's herbarium and Perry's collection. As a result of this research, the number of species common to both is now fifteen, with the possibility that nine of them represent specimens that Dickinson obtained directly from the expedition. After I report on the corrections in detail, I survey more generally the whole fifteen species.

Since one of the two collectors on the expedition, Samuel Williams, was a missionary sent by the American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM), the relationship between the ABCFM and the Dickinson family is also examined. This shows that in 1849 Samuel Williams, who was in Canton, China, and Daniel Webster were both honorary members of the ABCFM, and that Edward Dickinson joined in 1852 and became an honorary member in 1854. Furthermore, in 1855 all the members of Edward Dickinson's family, including the poet as well as Edward's brother's family, joined the ABCFM, and all appeared on the list of honorary members after 1860. The Dickinson family was so deeply involved with the ABCFM that they might have obtained some flower specimens from the expedition through this connection.

Keywords: Emily Dickinson, Japanese Flowers, Herbaria, Perry's Expedition to Japan

これまでエミリ・ディキンソン（Emily Dickinson）の植物標本帳とペリーの日本遠征隊（1853–54）が日本から持ち帰った植物標本のリストに共通にある十四種の植物について、2014年にハーバード大学植物標本館（Harvard University Herbarium）（HUH）で調査した上で、検討した。その結果、その内の七種は日本遠征隊が採取したものを詩人が分けてもらった可能性が高いと報告した（「エミリ・ディキンソンと日本の花（2-1）」及び「エミリ・ディキンソンと日本の花（2-2）」）。しかし、2015年に再度、HUHにおいて調査した結果、*Campanula trachelium* については、前回は見つからなかった標本が見つかった。また、植物の名前の変更などによって、ディキンソンの標本と日本遠征隊の標本とが同種だと今までわからなかった植物も見つかった。その結果、共通の植物は十五種となり、日本遠征隊のものという可能性が高い標本の数が九種となった。今回は、その他の修正点を含め、それら変更点について詳細に報告する。また、実際に日本で植物採取をした隊員の一人、サミュエル・ウイリアムズ（Samuel Wells Williams）はアメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）から中国へ派遣された宣教師だったので、ディキンソン家とアメリカンボードの関係についての調査結果を報告する。そして最後に、これまでの調査結果をまとめた。なお、今回はハーバード大学のホートン図書館（Houghton Library）の許可を得て、ディキンソンの植物標本帳の復刻版にある写真を使用することができた。

***Campanula trachelium* (追記)**

ディキンソンの植物標本帳には“*Campanula, alba*”とされていたが、復刻版で *Campanula trachelium* (EDH39) と修正された標本がある。ペリー遠征隊の採取した標本リストに *Campanula trachelium* (II 315) があったので、HUH でその標本を探したが見つからなかった。

Campanula trachelium は米国では nettle-leaved bellflower とも呼ばれる *Campanulaceae* (キヨウ科) *Campanula* (ホタルブクロ属) の一種で、多年生草本。開いた釣鐘状の青紫からライラック色の花を付ける。ヨーロッパや北アフリカが原産で、現在では北アメリカ大陸に帰化していて、道路脇などで見られる (*Missouri Botanical Garden*)。ディキンソンが参考にしていたと思われるエイモス・イートン (Amos Eaton) の *Manual of Botany* (1829) (鵜野「日本の花（2-2）」198、199) では八種が紹介されているが、*C. trachelium* はない (146–47)。ジョセフ・ブレック (Joseph Breck) の *The Flower Garden* (1859) では “CAMPANULA (Bell-Flower)” という項目の中で、米国原種の *C. rotundifolia* の他、*C. medium*, *C. persicifolia* 等、七種を解説しているが、*C. trachelium* はまだ含まれていない (97–100)。しかし、1866年出版のブレックの *New Book of Flowers* になると、他の八種と共に、*C. Trachelium* (Great Throatwort) が紹介されている (146–51)。それには、ヨーロッパ原産で、紫色または白色の花が、6月、7月に咲き、“Throatwort” という俗名は、喉の腫れや炎症に効くということからきていると解説されている (150)。

ディキンソンの標本で、その標本が “*Campanula, alba*” (39) とされていたからには、今は黄ばんでいるが元は白色だったようで、そこから復刻版の出版時には、白色の花が咲く *C.*

trachelium と修正されたようである。しかし、本著者はディキンソンの標本の写真（写真1）を精査した結果、茎や葉がなく花弁と萼弁だけなので判断は難しいが、概して *C. trachelium* は「花弁が中ほどまで百合のように別れているのに対して、彼女のそれは先だけが分かれている」ことから、*C. trachelium* ではなく、「日本原産の *C. punctata* var. *microdonta*（シマホタルブクロ）（佐竹他編『日本の野生植物』Ⅲ 153）など、ホタルブクロ（*C. punctata*）の一種である可能性もある」と、報告した（「日本の花（2-1）」161）。

さて、2015年3月に HUH で再度調査をした際、今回は協力者である HUH の Senior Curatorial Assistant であるウォルター・キトレッジ（Walter Kittredge）氏のお陰で、ペリーの日本遠征隊のウイリアムズとジェイムズ・モロウ（James Morrow）が下田で採取した *C. trachelium* とされている標本が見つかり、GH 549059とバーコードが付けられた（写真2）。しかも、この花はこれまで *C. trachelium* とされていたが、Kittredge 氏が今回精査したところ、そうではなく、*C. punctata* Lamarck（ホタルブクロ）だと判明し、そのように修正された（写真3）。しかも、彼はディキンソンの標本帳の復刻版で *C. trachelium* とされた写真も精査して、その標本も *C. punctata* だと断言された。

Campanula punctata Lam. はキキヨウ科ホタルブクロ属の一種で、その和名ホタルブクロは子供が螢を包んだのが由来とされている（牧野I 30）。牧野富太郎は次のように解説している：

東アジアの温帯に分布。日本各地の山野にはえる多年草。短い地下のつる枝でも繁殖する。茎は直立、高さ30~80cm、葉とともに粗毛が多い。根生葉は翼のある長柄があり卵心形、花時に枯れる。花は6~7月、花冠は長さ4~5cmで5裂、下向きに開く。雄しべ5、花柱1。がく片5、雌しべ1、柱頭3裂。（I 30）。

また佐竹義輔によれば、「花は…淡紅紫色または白色で、濃色の斑点があり、裂片に長い毛がある（『日本の野生植物』Ⅲ 153）。

佐竹は *C. punctata* はさらに、二種に分けられるとして、その内の一つ、var. *hondoensis* (Kitam.) Ohwi (ヤマホタルブクロ) は「本州（東北地方南部～近畿地方東部）の山地にはえ、全体にあらい毛があり、萼裂片は狭3角形で、湾入部に反り返る付属片がなく、花冠が紅紫色で種子に狭い翼のあるものである」とある（Ⅲ 153）。もう一種は var. *microdonta* (Koidz.) Ohwi (シマホタルブクロ) で、これは「全体に毛が少なく、花冠は小型で長さ30mm前後、白色、斑点が少ないか、まったくない。萼裂片の湾入部に反り返る付属片は小型のものからないものまで変化が多い。種子はほとんど翼がない。はじめ伊豆七島のものに命名されたが、その後、関東の太平洋岸に点々とあることがわかった」とある（Ⅲ 153）（下線は筆者）。

ペリーの日本遠征隊の標本は「太平洋岸」の下田で採取されたとあり、紅紫色ではなく、明らかに白色の花である。従って、*C. punctata* の内でも var. *microdonta* (シマホタルブクロ) の方であり、またディキンソンの標本もそうであると言える。即ち、筆者の推測が当たっていたのである。現在でも「関東の太平洋岸に点々と」しか自生していないこの亜種を彼女が19世紀半ばに入手したということは、非常に稀なことであり、その入手先は日本遠征隊以外には考えられない。

Chelidonium majus (追記)

「ディキンソンと日本の花 (2-1)」では、「Hakodadi, Williams & Morrow」とだけ記された、ディキンソンの花 (EDH 20) と同種と思われる *Chelidonium majus* の標本が HUH で見つかったことを報告した。¹⁾ その際、ディキンソンの標本との「関係は不明である」とした (162) が、佐竹他の『日本の野生植物—草本 II』を参考に再度調べた結果、次のことが判明した。

まず、大井次三郎は『日本の野生植物—草本 II』の中で、*Papaveraceae* (ケシ科) *Chelidonium* L. (クサノオウ属) を次のように解説している：

やわらかな越年草または多年草で、橙黄色の汁液がある。葉は互生または根生し、羽状に分裂する。花は黄色でやや大型、葉腋に1花ずつ、あるいは数花を散形状につける。萼片は2個あり緑色で、開花直前に散り落ちる。花弁は4個。雄蕊は多数。花柱は短く、柱頭は2裂する。…ヨーロッパから東アジアにかけて数種あり、アジアに豊富である。(122)
さらに、日本には *C. majus* L. var. *asiaticum* (Hara) (クサノオウ) と *C. japonicum* Thunb. (ヤマブキソウ) の二種があるとして、大きな違いとしては、クサノオウは「越年草で、茎は基部から数個の葉をつけて分枝する。散形花序は数花つけ、花柄があつて腋生する。花弁は長さ1~1.2cm」であるのに対して、ヤマブキソウは「根茎のある多年草で、茎は上方に少数の葉をつける。花は1~2個を腋生し、花弁は長さ2~2.5cm」で、「本州~九州、中国に分布する」とある (II 123)。

この区別からすると、ディキンソンの標本 (EDH 20) (写真 4) とペリーの日本遠征隊の標本 (写真 5) はどちらも、茎の先に数個の花を付けていることから、クサノオウの方だとわかる。そこで、大井によるクサノオウの更に詳細な解説を見ると、次のように書かれている：

…茎は中空で、高さ30~38cm。葉は卵型で長さ7~15cm、先は鈍く、1~2回羽状に分裂し、鈍頭または円頭の小葉にわかれ、下の方の葉には柄がある。花は5~7月に開き、花序は散形状で、葉腋から出た花柄に数花つけ、花には小花柄がある。萼片は長さ6~8cm。花弁は長さ10~12mm…北海道~九州、東アジアに分布する。ヨーロッパおよび西アジアのものは染色体数が違うので、変種に取り扱われる。(II 123) (下線は筆者)

ディキンソンの標本も日本遠征隊の標本も、花のつき方や葉の形状がまさにこの解説通りであり、しかも HUH の標本が北海道の函館で採取された点とも一致する。また『日本の野生植物』における写真 (II PL. 117) と比べても、どちらもクサノオウと呼ばれる変種 *C. majus* var. *asiaticum* の方であることがわかる。

拙論「日本の花 (2-1)」では、*C. majus* は「既に北米大陸に帰化植物として」認められていたので、ディキンソンの標本も「既にアマスト近辺に生育していた物かもしれない」としたが、上記のように、var. *asiaticum* は現在も「北海道~九州、東アジアに分布する」ものであり、「ヨーロッパおよび西アジアのものは染色体数が違うので、変種に取り扱われる」とあるように、北米に生育していたのと同じ種ではないことが判明した。故にディキンソンの標本は日本遠征隊のものと同じ種であり、彼女が19世紀半ばに手に入れたとすれば、遠征隊が採取したもの以外には考えられない。

Trillium erectum (追記)

「日本の花（2-2）」では、ディキンソンの標本帳の7頁にある標本は *Liliaceae* (ユリ科) の *Trillium* (エンレイソウ属) *erectum* と確認したが、52頁の方（写真6）は HUH で見つかったペリーの日本遠征隊の Williams と Morrow が採取したもの（写真7）と同じ *Trillium tschonoskii* (シロバナエンレイソウ、別名ミヤマエンレイソウ) だと推定した（200）。

Trillium tschonoskii について、佐竹は「山地の林下にはえる多年草。エンレイソウ²⁾に似ているが、外花被片は長さ20~27mmで先がとがり、内花被片は白色花弁状で、外花被片より長く、薬は花糸と同長である。エンレイソウと同じような所にはえ、北海道~九州、朝鮮・中国・樺太に分布する」と、解説している。（I 44）³⁾

再度、ディキンソンの標本を確認したところ、以前は「外花被と内花被の大きさや形が同じくらいだ」（200）としていたが、この解説を参考によく見ると、花被の長さがほんの少し異なっていることが判明し、ディキンソンの標本は *T. tschonoskii* についてのこの描写通りであることがわかった。それ故、52頁の標本は復刻版が認定した *T. erectum forma luteum* ではなく、*T. tschonoskii* であることがより確実となり、日本遠征隊のものと同種であり、遠征隊が採取したものであるという可能性がさらに高まった。

Caltha palustris (追記)

「日本の花（2-2）」で報告したように、2014年に HUH で見つかったウイリアムズとモロウが採取した植物標本は *Ranunculaceae* (キンポウゲ科) *Caltha* (リュウキンカ属) *palustris* L. と認定されたが、ディキンソンのこの花の標本（EDH 29）（写真8）はそれとは葉の形状が異なっていた。一方、HUH で見た1993年に福島県で採取されたという *Caltha palustris* L. var. *nipponica* Hara (リュウキンカ) とは、花も葉もそっくりであった（写真9）。そこで、ディキンソンの *C. palustris* とされた標本は、亜種である *C. palustris* L. var. *nipponica* Hara、であると判断した（201-202、212-13）。

佐竹他編の『日本の野生植物』で、田村道夫がこの亜種は「本州、九州、朝鮮に分布する」（II 58）と解説していることから、欧米ではこの亜種は今でも存在しないはずである。では、どのような経緯で詩人がこの日本の亜種を手に入れたかという問題が残る。HUH にはペリーの遠征隊の採取したものの他に、北太平洋遠征隊（1853-56）の採取したものが数点あることから、*Caltha palustris* とは認定されたが、まだ亜種までは判別されていない段階だったので、亜種とは気づかず、ディキンソンに与えられたのかも知れない。

Chaenomeles japonica

もう一点、共通の花の標本が存在したことがわかった。その花とは、ディキンソンの標本では “Japonica” とのみ記されていたが、復刻版出版の折に、*Rosaceae* (バラ科) の *Chaenomeles japonica* (EDH 27)、即ち、ボケ属のクサボケと修正されたもの（写真10）と、ペリーの標本リストに “CYDONIA JAPONICA, Pers. Pyrus Japonica, Thunb.” と記されているものである（II 311）。このように学名が異なっているので、両者のリストを照らし合わせた際には、同じ花だ

とは気付かなかったのである。

このように名前が異なっていたのは、18世紀にカール・ペーター・ツンベルグ (Carl Peter Thunberg) が日本で発見し *Pyrus japonica* と名付けて以来、他の種が混同され、また名前が変わるものなど、複雑な経緯があったからである。この花はアリス・コーツ (Alice M. Coats) (48) やクロード・ウェーバー (Claude Weber) (17) によれば、1784年にツンベルグによって箱根で発見され、*Pyrus japonica* と名付けられた。その後、1796年にジョセフ・バンクス (Sir Joseph Banks) が中国からロンドンのキュー庭園 (Kew Garden) に持ち帰った植物をそれと同じものだと混同して、1803年に *Botanical Magazine* に “*Pyrus japonica*” として紹介した。ウェーバーによれば、1807年、クリスチャン・ヘンドリック・ペルズーン (Christiaan Hendrik Persoon) がその種子の多さからみて、*Pyrus* 属ではなく、*Cydonia* 属 (the common Quince) であると判定し、*Cydonia japonica* (thunb.) Pers. と修正した (17)。コーツの解説ではその修正には触れておらず、1818年にロバート・スウィーツ (Robert Sweet) がバンクスの持ち帰ったものはツンベルグの *Pyrus japonica* とは別の種だと気づき、*Pyrus speciosa* と修正したが、一般にはその修正は浸透せず、“japonica” と呼ばれ続けたという (48)。確かに、1855年出版の詩人キャサリン・ウォーターマン (Catharine H. Waterman) の *Flora's Lexicon* でも、*Pyrus japonica* の名前で紹介されている (168)。

またウェーバーによれば、1822年リンドリー (John Lindley) が主として果実の性質によって、*Cydonia* 属と区別して *Chaenomeles* 属を設定した。その結果、大方の研究者はこの区別に同意したが、それに従わずその後も *Chaenomeles* 属の種を *Cydonia* 属の種として扱い続けた研究者もいた (17)。実際、ブレックの *The Flower Garden* (1859) では、Appendix の “Ornamental Shade Trees” の中に、*Chaenomeles* ではなく、*Cydonia* 属の項目があり、*C. Japonica var. plena* だけが挙げられ、「八重の Japan Quince が移入されたが、まだ一般的ではない。大変美しいらしい」と解説されている (374)。New Book of Flowers (1866) でも、“Descriptive List of Hardy Flowering shrubs, suitable for the Shrubbery, lawns, etc.” のリストの中に、*Cydonia* (Japan Quince) という項目があり、古代のクレタ島の Cydon という町がこの花の原産地だという理由でそう呼ばれていると、説明している。そして、*Cydónia Japónica* が具体的に挙げられ、この種はかつて *Pyrus Japonica* と呼ばれていたが、日本が原産で真紅の花をつけるのと、雑色のものも 2 種類あって、4 月に咲く。灌木の頑丈さと花の鮮やかさから、生垣や花園などに最適としている。また、ある作家は春の雪の中にこの真紅の花が咲いているのを見て、これまで見た中で最も美しい絵になる光景だったと言っている、と紹介している (409-10)。

日本の開国後、1869年に英国ブリストルの養樹園 the firm of W. Maule and son of Bristol が日本からツンベルグが見つけたものと同じ種の花を英国に持ち帰ったが、中国から持ち帰ったものが既に “Japonica” として通っているので、「仕方なく Dr. Masters⁴⁾ によって」 “*Pyrus maulei*” と名付けられた (Coats 48)。しかしその後、この植物が小さな鈍鋸歯の葉とサーモンオレンジ色の花を持つ小型の種であって、正に、ツンベルグの *Pyrus japonica* と同一種であるとわかり、“*Chaenomeles japonica* (Thunb.) Lindl. Ex Spach” と修正された。そして *Chaenomeles “Maulei”* という名前は Maule 達がヨーロッパに持ち込んだ性質を持っている栽培変種植物を指すよう

になった (Weber 18)。

このように、長い間名前の混乱が続いたが、現在では中国原産のものは “*Chaenomeles speciosa*” (ボケ) で、日本原産のものは “*Chaenomeles japonica*” (クサボケ) と区別されている (Coats 49)。『原色牧野日本植物図鑑 I』では、*Chaenomeles japonica* は次のように解説されている。

ボケに似て小型の低木なので草とついた。本州、九州の日当りのよい山野にはえる落葉小低木。茎は下部は横に伏し、高さ30~100cm、とげ状の小枝がある。葉は互生し長さ2.5~5 cm。花は4~5月、葉より先に短花柄で単生または2~4束生、がくは縁毛がある。雄しべ多数。花柱4~5、雄花の下位子房はやせ、雌花は肥厚。果実は食べられる。
(I 152)

上記と同じ頁に、*Chaenomeles speciosa* が別名 *Chaenomeles lagenaria* で掲載されていて、こちらは中国原産であるが、古くに日本に渡来し、自生するようになった。この木の高さは2 m内外で、木自体も実も日本原産のものより少し大きめであると解説している (I 152)⁵⁾

さて、ディキンソンの標本では “Japonica” とのみ書かれていたものが、2006年の復刻版で “*Chaenomeles japonica: DWARF JAPANESE QUINCE*” (27) と修正された。しかしアルフレッド・レーダー (Alfred Rehder) によれば、*Chaenomeles japonica* が米国で栽培され始めたのは1874年であるという (400)。1874年以降にディキンソンが手に入れたのであれば、名前も書けたはずであるので、それ以前のはずである。一方、1866年には、ブレックの *New Book of Flowers* に、中国産であるがかつて *Pyrus Japonica* と呼ばれていた *Cydonia Japonica* について詳細な解説が書かれているので、ディキンソンが手に入れたのが1866年以降であれば、彼女もそれらの名前を知っていたかもしれない。当時は、中国産や日本産の花の区別なく、ただ “Japonica” と呼んでいた (Coats 48) ということなので、ディキンソンもそれにならって、詳細な区別を知らずにそう記したのかもしれない。⁶⁾

マルタ・マクダウエル (Marta McDowell) は、*Emily Dickinson's Garden* の中で、Quince (マルメロ) の灌木は日本原産ということから、一般には “japonica” と呼ばれていて、ディキンソンの庭園にも少なくとも1本植えられていて、その実からジャムを作っていたと書いている (156)。この木は現存していないので、ディキンソンの植物標本にあるものと同じものであるかどうかは不明である。しかしこのように、ディキンソンの植物標本にある日本原産の *Chaenomeles japonica* (クサボケ) はどのようにして、いつ、手に入れられたのであろうか？

一方、ペリーの報告書では、日本遠征隊が採取したこの花はグレイによって *Cydonia japonica* と判定され、横浜と函館の生垣や道路脇に咲いていたと、また日本の装飾用の栽培種の一種だという解説が付けられている (II 311)。また、同じ頁に、“PYRUS MALUS, Linn, Hakodadi. Doubtless cultivated for its fruit.” と “PYRUS SPECTABILIS, Ait. P. baccata, Thunb. Fl. Jap. p. 207 Hakodadi and Simoda.” も掲載されている。

さて、2015年3月にHUhで調査した結果、一枚の標本紙に *Chaenomeles* の標本が数点並べられているのが見つかった (写真11) :

*CHAENOMELES SPECIOSA (Sweet) Nakai / Determined by Claude Weber, 1962 [ラベル]
[左上 2点]

*HERBERIUM OF THE NORTH PASIFIC EXPLORING EXPEDITION / under
Commanders Ringgold and Rodgers, 1853-56 / by [?????] Japonica, [??] / C.
Wright Coll. Hakodadi Japan [ラベル] / Chaenomeles [手書き]
[左下 3 点]

*CHAENOMELES JAPONICA (Thunb.) Lindl. Ex Spach / determined by Claude Weber
[ラベル] / Yokohama Hakodadi / Williams & Morrow
[右上 2 点]

*Cydonia japonica Lind [手書き] / JAPONICA INSULA JESSO, circa HAKODATE Dr.
Albrecht. 1861-1863. / Hokkaido / [ラベル]
[右中央 1 点]

*Herb. Lugd. Batav. [タイプ] / Cydonia japonica Per[??] [手書き] [ラベル]
[右下 1 点] (鍵カッコ内は著者の注) (下線は筆者)

これらの内、三番目の右上の標本二点は、ウイリアムズとモロウが横浜と函館で採取したものと書かれています（拡大写真12）、ウェーバーが“CHAENOMELES JAPONICA (Thunb.) Lindl. Ex Spach”と認定したとある。⁷⁾ キトレッジ氏と共に、この標本とディキンソンの標本とを比べたところ、花弁の色や形から、どちらも *Chaenomeles japonica* (Thunb.) Lindl. Ex Spach であると断定することができた。それ故、彼女の標本が日本遠征隊の持ち帰った花の一部であるという可能性は非常に高い。彼女はグレイの判定の前に手に入れており、詳細な区別はわからず、ただ日本から持ち帰ったことは確かなので、通称の“Japonica”とのみ、標本に記したのではないかと思われる。

アメリカンボード (The American Board of Commissioners for Foreign Missions)

著者はこれまで、ペリーの日本遠征中、日本で植物採取したサミュエル・ウイリアムズがアマスト大学と関係の深い宣教師派遣組織であるアメリカンボードから派遣された宣教師であったことから、ディキンソン家が彼から標本を譲り受けた可能性があると論じた（「日本の花（2-1）」157、「日本の花（2-2）」197）。

丸山健夫によれば、ウイリアムズは1833年、21歳の時にアメリカンボードが「中国につくる印刷所の職員を必要としたとき、印刷所経営の父の勧めで志願して」中国に行った（45）。そして1835年には、マカオの印刷所で働いている間に、英國の政府機関の翻訳官兼宣教師であったカール・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff）の所で、難破して助けられ、聖書の日本語への翻訳を手助けしていた日本人三人と出会った。そして1837年には、他の難破者も含め、七人の日本人を帰国させるため日本に向かった「モリソン号」に「植物学も勉強していたので、博物学者という立場で」乗り込んだ（35-54）。しかし、モリソン号は鎖国政策を堅持する幕府の砲撃を受け、マカオに逃げ帰った。そしてその後、1853年、日本遠征の途上にあったペリーが通訳官として選んだのが、広東に居たウイリアムズであった。丸山は「宣教師のウイリアムズが、ペリーによって日本に上陸できれば、それはアメリカ人の心の問題としても、象徴的な出来事になるはずだった」（131）と、書いている。

ディキンソン家とアメリカンボードとの関係を知るため、機関誌 *Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* を調べた結果、次のことが判明した。1849年の機関誌には、名誉会員のリストの中に、ダニエル・ウェブスター (Daniel Webster) (48) と、当時既に広東に駐在していたサミュエル・ウイリアムズ (49) の名前が掲載されていて、1850年 (24)、51年 (189)、1853年 (197) にも同様に掲載されている。ウェブスターは1849年当時、上院議員であったが、1850年7月から1852年10月に亡くなるまでミラード・フィルモア (Millard Fillmore) 大統領の下で国務大臣を務めていて、東洋への遠征を推進していた (Rayback 314–15; Remini 711–12; Uno, “Dickinson’s Seclusion,” 136)。彼がこのようにアメリカンボードの名誉会員であったと言うことからも、公にはされなかつたが、日本への遠征隊の派遣に宣教という目的もあつたことを示している (Uno, “Dickinson’s Seclusion” 137–38)。

しかも1852年6月のホイッグ党大会で、ウェブスターを大統領候補として応援した詩人の父親、エドワード・ディキンソン (Holloran, 304–305) の名前が1852年のアメリカンボードの機関誌の新入会員のリストに載せられている (205)。これはウェブスターの日本遠征計画を応援する意味もあったからではないだろうか。そして1854年には会員としてだけでなく (235)、名誉会員としての会議出席者の中にも彼の名前が挙げられていた (6)。さらに、1855年の機関誌には、1850年以降の新入会員として、詩人の母親、兄、妹と共に、詩人本人の名前まで載せられていた。しかも、エドワードの弟で、ウースター在住のウィリアム (William Dickinson) とその妻、息子、そして彼の妻⁸⁾の名前が並んでいる。また、エドワードのもう一人の弟フレデリック (Frederick Dickinson) とその妻の名前もその後に並んでいる (192)。⁹⁾ 1854年までの新人会員のリストにはエドワード以外はなかった。毎年、この機関誌が9月から10月に発行されていて、ウェブスターが1852年10月に亡くなった後の1853年にも名前が掲載されていたこと、印刷期間などを考慮すると、会員名は半年または一年遅れで掲載されているようであるので、エドワード以外のディキンソン家の人々は1854年の後半または1855年前半に、計十人、入会したことになる。そして1857年と1859年の機関誌には会員リスト自体がなかったが、1856年 (250)、1858年 (190) に、同じく、エドワードを含め計十一人の名前が会員リストに掲載されている。また1860年には、それら全員の名前が名誉会員のリストに掲載されている (184)。さらには、人数が増えたので名誉会員のリストは5年おきに掲載されることとなつたのであるが (173)、1865年の名誉会員リストにも彼らの全員の名前が掲載されている。

このように、1854年以降、アマストおよびウースターのディキンソン家が大挙してアメリカンボードに入会したのは、何故なのであろうか？1852年の機関誌に、名誉会員になるには、一度に (“at one time”) 100ドル払えばだれでも名誉会員になれると書かれている (204)、1852年以降にもそう書かれているが、ディキンソン家では、家族全員が一人ずつ100ドル支払ったわけである。エドワード以外、実際にその会議などには参加しなかつたはずで、当時の100ドルは今と違つて相当の（おそらく三十倍位の）価値があったことを考慮すると、これは相当多額の寄付行為であったと思われる。そのような多額の寄付をした理由が何であったにせよ、アメリカンボードで、ディキンソン家の地位が高まつたことは確かである。

1850年代後半から徐々に外出をしなくなり、1860年には完全に隠遁生活に入り、教会にも行

かなくなつた (Habegger 287) エミリの名前までもが名誉会員リストにあるのは、単にディキンスン家の地位を高めるだけだったのだろうか？1855年1月に日本遠征隊の持ち帰ったものが、植物標本を含め、ワシントンに到着し、その直後の2月に彼女が当地を訪ねていることから、その間に遠征隊が持ち帰った物品を、植物を含め、彼女が見た可能がある。実際に植物採取をした二人の隊員の内の一人であるウイリアムズはアメリカンボードから中国に派遣された宣教師であったが、日本遠征後、帰国せずそのまま広東に留まった。日本遠征を推進していたウェブスターが1840年代からアメリカンボードの名誉会員であったこと、彼を支持していた詩人の父親が1852年に会員になり、1854年の後半か1855年前半にエミリを含めたディキンスン家一族が入会し、その後名誉会員になったこと、1855年春、植物標本が判定のため、ハーバード大学のグレイ教授に送られたこと、その年の内に政府が議事堂の側に温室を造ったように (Uno 142) ディキンスン家に温室が作られたことなども考慮すると、アメリカンボードで重要な位置を占めていたディキンスン家が、エミリのために、ハーバード大学に届いた植物標本の一部を、アメリカンボードを通じて譲ってもらった可能性が考えられる。それならば、彼女自身もアメリカンボードに入会した理由となるであろう。¹⁰⁾

さて、これまで「日本の花（2-1）」、「日本の花（2-2）」、そして今回の「日本の花（2-3）」と、エミリ・ディキンスンの植物標本帳とペリーの日本遠征隊が採取した植物に共通の日本原産の花、十五種について検討した。その結果を簡単にまとめると、次のようになる。

* *Lonicera japonica* (EDH 52) については、1862年にニューアークに持ち込まれたとされているが、日本遠征隊のウイリアムズとモロウが採取した標本 (GH 518575) の一部をディキンスンが譲り受けた可能性がある。

* ディキンスンの標本帳で *Berberis vulgaris* (EDH 1) とされているものは、葉の形が幅広の倒卵形で、また花が上を向いているなどの点で、HUHで見つかった日本遠征隊の標本 (GH 295732) と同じ *Berberis amurensis* var. *japonica* ではないかと思われる。そうであれば、日本遠征隊から譲り受けた可能性が高い。

* *Calendula officinalis* (EDH 2) については、HUHに日本遠征隊によって採取された標本 (GH 518579) はあったが、外来種とはいえ、既に米国に移入され一般的になっていたので、ディキンスンのものは遠征隊の標本の一部をもらったものかも知れないし、また地元に既にあったものかも知れない。

* *Campanula trachelium* (ED 39) については、ディキンスンの標本も日本遠征隊のもの (GH 549059) も、どちらも日本の太平洋沿岸に点々と自生している *C. punctata* var. *microdonta* (シマホタルブクロ) であることがわかった。詩人は日本遠征隊の経由以外に、手に入れることはできなかつたはずである。

* *Chelidonium majus* (EDH 20) については、HUHで遠征隊の標本 (GH 589560) が見つかり、どちらも日本にしかないクサノオウ *Chelidonium majus* var. *asiaticum* であることがわかつた。これはヨーロッパや西アジアのものとは染色体数が異なる変種である。従つて、ディキンスンの標本は遠征隊の採取したものである可能性が非常に高い。

- * *Equisetum arvense* (EDH 39) については、HUH で探したが、遠征隊の採取したものは見つからなかった。北半球の温帯以北に広く分布していて珍しくなく、保存されなかつたようである。それ故ディキンソンに与えられたのかもしれないし、あるいは詩人が地元で手に入れた物かも知れない。
- * ディキンソンの標本には名前がなく、復刻版で *Erigeron pulchellus* (EDH 52) と認定されたこの花については、遠征隊の採取したもの (GH 518578 及び GH 518576) が見つかった。しかし両者は見た目が異なるので、別の種であると思われる。
- * *Pisum sativum* (EDH 57) については、遠征隊のリストにはあるが、HUH で現物は見つからなかつた。既に世界的に栽培されていて珍しくはなかつたので、ディキンソンに与えられたか、あるいはディキンソンの標本も別のルートで手に入れた物かも知れない。
- * *Saxifraga sarmentosa* (EDH 25) については、現在では *Saxifraga stolonifera* と呼ばれているが、日本遠征隊の採取したもの (GH 518569) や北太平洋探検隊の採取したもの (348199) も見つかった。この種は今では米国西海岸の三州に移入されてはいるが、東北部にはないと言うことなので、ディキンソンは日本遠征隊か北太平洋遠征隊からしか、手に入る方法はなかつたと思われる。
- * *Trillium erectum* については、ディキンソンの標本中の二点の内、52頁の標本 (EDH 52) は復刻版で認定された *Trillium erectum forma luteum* ではなく、日本、朝鮮、サハリンに自生する *T. tschonoskii* であり、HUH の遠征隊の標本 (GH 518561) も同じ種であったので、詩人が遠征隊のものをもらい受けた可能性が非常に高い。
- * *Vicia sativa* (EDH 58) については、原産地はオリエントから地中海にかけての地方で、アジアなどの温暖な地域に広まったもので、北米でも早くから移入され、19世紀には外来種とは見なされないほど定着していた模様である。それ故、遠征隊が採取したものも HUH に保存されてはいたが (GH 518571)、ディキンソンの標本は他から手に入れた可能性もある。
- * *Caltha palustris* (EDH 29) については、ディキンソンの標本と、HUH で見つかった遠征隊のその標本 (GH 518564) とは、葉の縁の形状が少し異なるので、別の種と思われる。しかしディキンソンの標本は1993年に福島で採取され、HUH に保存されている *Caltha palustris L. var. nipponica* (リュウキンカ) とそっくりである。それ故、やはり遠征隊が採取したが、亜種だと気が付かず、同じ種だと思って、それをディキンソンに与えた可能性がある。それ以外、彼女が手に入る手段はないと思われる。
- * *Convallaria majalis* (EDH 42) については、ディキンソンの標本の花弁はピンク色で、米国には自生しない種である。一方、HUH に保存されていた日本遠征隊の標本の中に、白い花の他に、花弁が赤みを帯びたものもあった。それ故、詩人が日本遠征隊の採取したもの的一部を譲り受けた可能性が高い。一方、子供時代からの友人であるウィリアム・クラーク (William Clark) が植物採集に熱心であり、1850年から1852年までドイツに留学中にも採取していたので、ドイツで採取して持ち帰った植物標本であった可能性もある。
- * ディキンソンの標本帳の復刻版で、*Kerria japonica* var. *pleniflora* (EDH 41) とされた花は、

日本遠征隊のリストにはあったが、HUH では現物が見つからなかった。この花は19世紀初めにヨーロッパにもたらされ、1838年までに英國の数多くの家の庭で栽培され、19世紀半ばでは米国でも珍しくはなかった。それ故、HUH に保存されずに、ディキンソンに譲られたのかも知れない。また他から入手した可能性もある。

* *Chaenomeles japonica* (EDH 27) は長い年月の間に、名前の混乱があったため、当初ディキンソンと日本遠征隊との共通の花だとは気が付かなかった。詩人は “Japonica” とのみ記していたが、復刻版の際に *Chaenomeles japonica* と修正された。一方、日本遠征隊のリストでは、“CYDONIA JAPONICA, Pers. Pyrus Japonica, Thunb.” となっていたが、現在では HUH で *Chaenomeles japonica* (Thunb.) (GH 549057) と認定されている。見たところもディキンソンの標本と同じである故、彼女が遠征隊から一部をもらった可能性が高い。

このように、日本遠征隊の植物標本とエミリ・ディキンソンの標本帳に共通にある十五種の内、九種については、遠征隊の標本と彼女の標本は同じ種であり、19世紀半ばには日本遠征隊以外、ディキンソンが日本原産のそれらの植物を手に入れる可能性はなかったと思われる。それ故、採取された植物の一部を分けてもらったと推測できる。それが事実ならば、HUH に無かった他の種についても、当時既に珍しくなっていて公に保管する必要がなかったので、彼女に分け与えられたのかも知れない。またこれまで調査した1855年当時の、例えば遠征隊の植物標本がワシントンに届いた直後に彼女が当地を訪れていること、ディキンソン家とアメリカンボードとの関係、自宅の温室の造営などといった彼女の周辺の状況証拠からも、彼女が日本遠征隊の採取した植物の一部を譲り受けた可能性が限りなく高いと言うのが私の結論である。

注

* 本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究(C) (23520348)）の助成を受けた研究の一部である。

- 1) なおその後、その標本に GH589560 と、バーコードが付けられた。
- 2) *Trillium smallii* タチアオイとも呼ばれている（牧野 I 240）。
- 3) 佐竹は「内花被片は白色花弁状」としているのに対して、牧野は同種について、「内花被淡黄色」(II 250) としている点で、描写が微妙に異なっている。
- 4) 英国の植物学者・分類学者の Maxwell T. Masters を指している。
- 5) なお、佐竹他編の『フィールド版日本の野生植物 木本』では、バラ科の *Chaenomeles* (ボケ) 属は次の四種が挙げられている：クサボケ (*Chaenomeles japonica*)、ボケ (*Chaenomeles speciosa*)、カリン (*Chaenomeles sinensis*)、マルメロ (*Cydonia oblonga*) (71, PL247-48)。
- 6) なお、1861年4月15日の *Springfield Daily Republican* 紙の “Trees & Shrubs” 関係の広告欄で、Robert E. Moore & Co. がチコピーとスプリングフィールドにあるイーグル養樹園 (Eagle Nurseries) が “Japonicas, Honeysuckle” などを仕入れたとしている。しかし日本からの直接の輸入かどうかわからぬので、上記にあるように、“Japonica” と呼ばれていた中国産の *Pyrus speciosa* かと思われる。
- 7) ウェーバーは、1963年4月発行の学術雑誌 *Arnoldia* 23.3に論文 “Cultivars in the Genus *Chaenomeles*” を発表しているので、おそらく、1番目の左上2点の標本と同様、1962年に認定したと思われる。この標本がペリーの日本遠征隊のウィリアムズとモロウによって採取されたものとわかったので、その

リストを作成中の HUH のキトレッジ氏によってデータベースに GH 549057として入れられた。

- 8) ここでは Helen Dickinson となっているが、Habegger の伝記にある家系図から、詩人の従弟 William Hawley Dickinson の妻 Ellen E. Pike Dickinson のことだと思われる (631)。
- 9) その後に、Rev. N. S. Dickinson と Rev. Wm. C. Dickinson という名前が続くが、エドワード・ディキンソン家との関係は今のところ不明である (192)。
- 10) なお、1855年9月13日付けで、広東に居たウイリアムズがグレイに手紙を書いたが、その中で、グレイが吟味しやすいような形で植物が彼の元に届いたことを知って嬉しく思っていること、また議会が計画中の日本遠征の報告書に採取した植物について書いてほしいとも、書いている：

I am glad to learn that the plants reached you in such order that you can examine them, and learn somewhat of the flora of Shimoda & Hakodadi (sic).... I should like to have some of them go into the report which Congress has calls for respecting the Japanese Expedition, as that seems to be the most appropriate plan.... [Courtesy, Library of the Gray Herbarium, Harvard University]

参考文献

- Breck, Joseph. *The Flower Garden or Breck's Book of Flowers*. New York: A. O. Moore, Agricultural Book Publisher, 1859. Reprint by BiblioLife, LLC. Print.
- . *New Book of Flowers*. N.Y.: Orange Judd Company, 1866. Reprint from the collections of the University of California Libraries. Print.
- Coats, Alice M. *Garden Shrubs and their Histories*. N.Y.: Simon and Schuster, 1992. Print.
- Eaton, Amos. *Manual of Botany for North America: containing generic and specific descriptions of the Indigenous Plants and Common Cultivated Exotics, growing North of the Gulf of Mexico*. Fifth Edition. Albany: Websters and Skinners, 1829. Print.
- Dickinson, Emily. *Emily Dickinson's Herbarium*. A Facsimile Edition. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 2006. Print.
- "Gray Herbarium." Included in "Specimens Databases." *Harvard University Herbaria*. web.
- Habegger, Alfred. *The Life of Emily Dickinson*. NY: Random House, 2001. Print.
- Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*. 3 vols. Washington: Beverley Tucker, 1856. Print.
- Holloran, Peter. "Webster, Daniel." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Eberwein, Jane Donahue. Westport, CT: Greenwood Press, 1998. 304–305. Print.
- Johnson, Thomas H., ed. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1958. Print.
- McDowell, Marta. *Emily Dickinson's Garden*. New York: McGraw-Hill, 2005. Print.
- Missouri Botanical Garden. "Campanula trachelium." *Plant Finder*. Web. 15 June, 2015.
- Phelps, Lincoln. *Familiar Lectures on Botany, including Practical and Elementary Botany, with Generic and Specific Descriptions of the Most Common Native and Foreign Plants and a Vocabulary of Botanical Terms, for the Use of Higher Schools and Academies*. Hartford: F. J. Huntington, 1832. Print.
- Rayback, Robert J. *Millard Fillmore: Biography of a President*. Newtown, CT: American Political Biography Press, 1998. Print.
- Rehder, Alfred. *Manual of Cultivated Trees and Shrubs: Hardy in North America*. 1940. Reprint of Second Revised Edition. Caldwell, New Jersey: The Blackburn Press, 2001. Print.
- Remini, Robert V. *Daniel Webster*. New York: W. W. Norton, 1997. Print.
- Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*. Boston: Press of T. R. Marvin, 1849–1862. Print. [Courtesy, Congregational Library and Archives]
- Robert E. Moore & Co. "Trees and Shrubs." *Springfield Daily Republican* 15 April 1861.

- Waterman, Catharine H. *Flora's Lexicon*. Boston: Philips, Sampson, & Co, 1855. Print.
- Weber, Claude. "Cultivars in the Genus Chaenomeles." *Arnoldia* 23.3 (April 5, 1963) : 17-75. Print.
- Williams, Samuel W. A Letter to Asa Gray dated September 13, 1855. *Asa Gray Correspondence files of Gray Herbarium* [Courtesy, Library of the Gray Herbarium]
- 牧野富太郎、『コンパクト版 原色牧野日本植物図鑑』、全3巻。東京：北隆館、2012. Print.
- 丸山健夫、『ペリーとヘボンと横浜開港―情報学から見た幕末』。京都：臨川書店、2009. Print.
- 佐竹義輔、大井次三郎、北村四郎ほか編、『日本の野性植物 草本』。全3巻。東京：平凡社、1981年。Print.
- . 『field 版 日本の野生植物 木本』。東京：平凡社、1993. Print.
- 鶴野ひろ子 (Uno, Hiroko). "Emily Dickinson's Seclusion and Japan." 『神戸女学院大学論集』 58.2 (2011年12月) : 129-50. Print.
- . 「エミリ・ディキンソンと日本の花 (1)—*Lonicera Japonica* 日本産スイカズラ」。『神戸女学院大学論集』 60.1 (2013年6月) : 194-203. Print.
- . 「エミリ・ディキンソンと日本の花 (2-1)」。『神戸女学院大学論集』 61.1 (2014年6月) : 155-167. Print.
- . 「エミリ・ディキンソンと日本の花 (2-2)」。『神戸女学院大学論集』 61.2 (2014年12月) : 195-203. Print.

写真

EDH: Dickinson, Emily. *Herbarium*, circa 1839-1846. MS Am 11188.11, Houghton Library, Harvard University. Web. 23 September 2015.

[Courtesy, Houghton Library, Harvard University, Cambridge, Massachusetts, USA]

HAA: Herbarium of the Arnold Arboretum of Harvard University

[Courtesy, the Herbarium of the Arnold Arboretum of Harvard University, Cambridge, Massachusetts, USA]

GH: Gray Herbarium of Harvard University

[Courtesy, the Gray Herbarium, Harvard University, Cambridge, Massachusetts, USA]

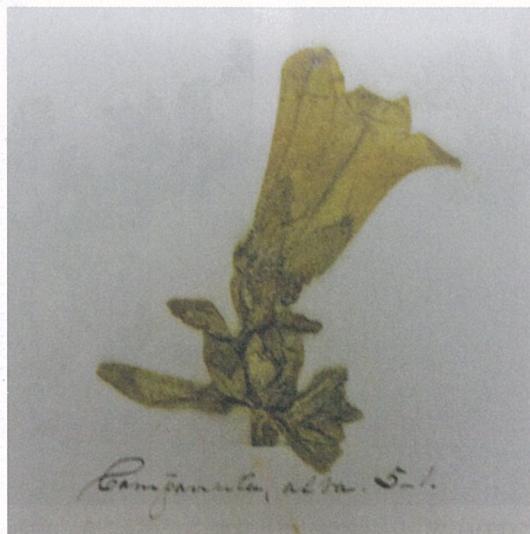


写真 1 “*Campanula, alba*” / *Campanula trachelium* (EDH 39) [seq. 42]

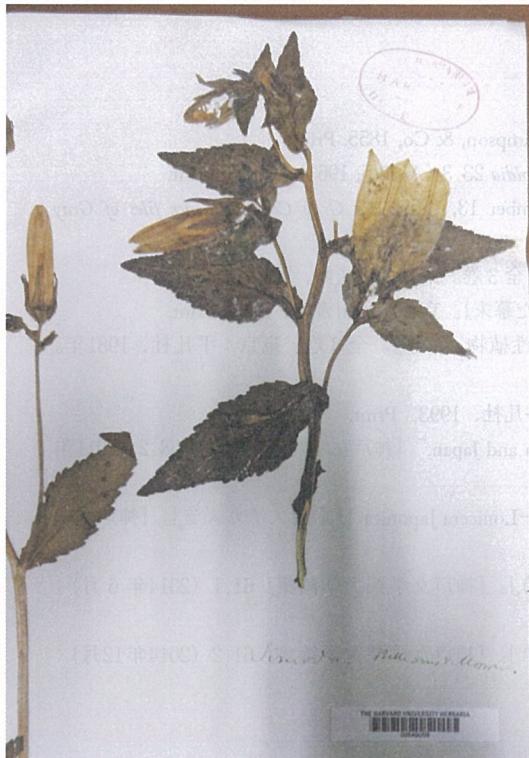


写真2 “Simoda, Williams & Morrow” *C. trachelium*
[GH 549059] [HUH]

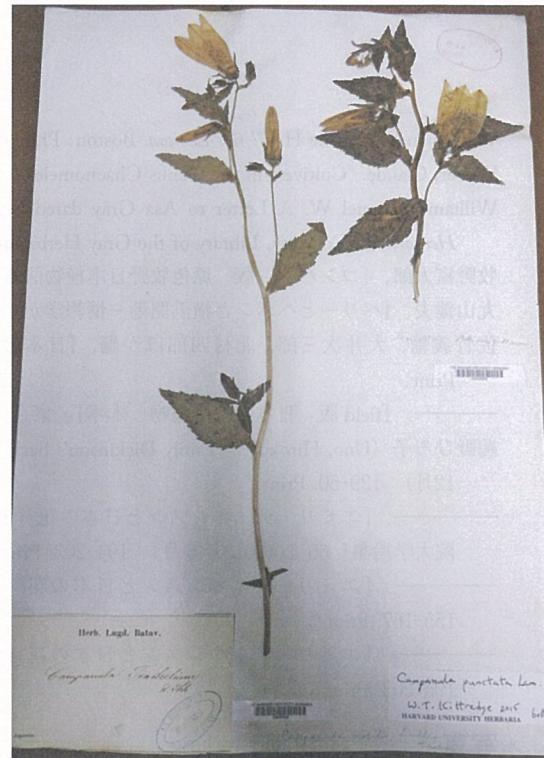


写真3 “Campanula punctata, Lam. / W. T. Kittredge 2015 /
Harvard University Herbaria” (右下に記載)

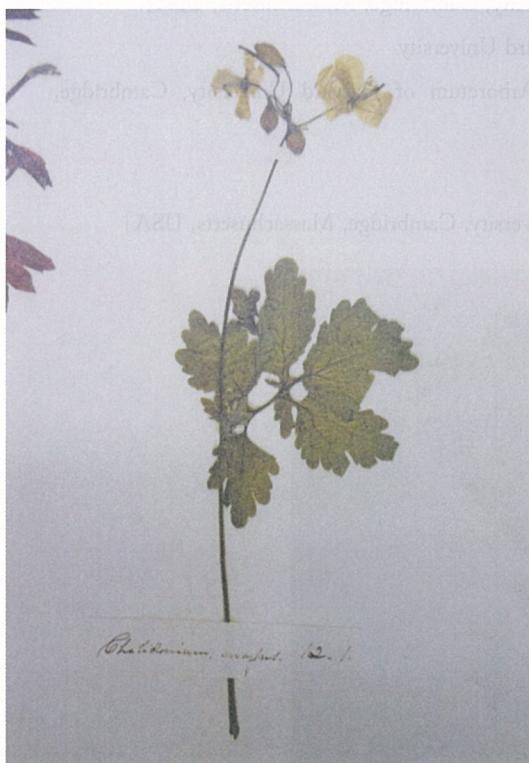


写真4 “*Chelidonium, majus*” (EDH 20) [seq. 23]
→ *Chelidonium majus* L. var. *asiaticum*

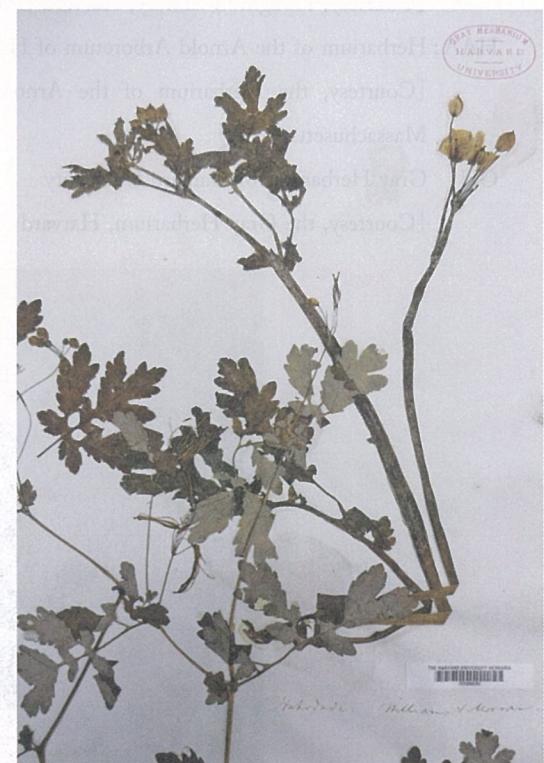


写真5 “Hakodadi / Williams & Morrow” [GH 589560]
[HUH] → *Chelidonium majus* L. var. *asiaticum*



写真 6 *Trillium, flavidum* (*Trillium erectum* forma luteum:
RED TRILLIUM (YELLOW FORM)
(EDH 52) [seq. 55] → *Trillium tschonoskii*

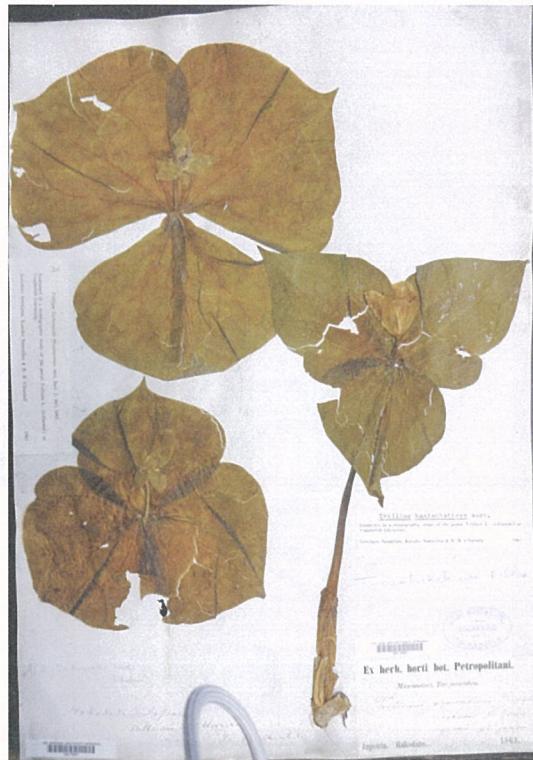


写真 7 "Williams & Morrow, Hakodadi, Japan, May 28, fls.
Greenish white" *Trillium tschonoskii*
[GH 518561] [HUH]

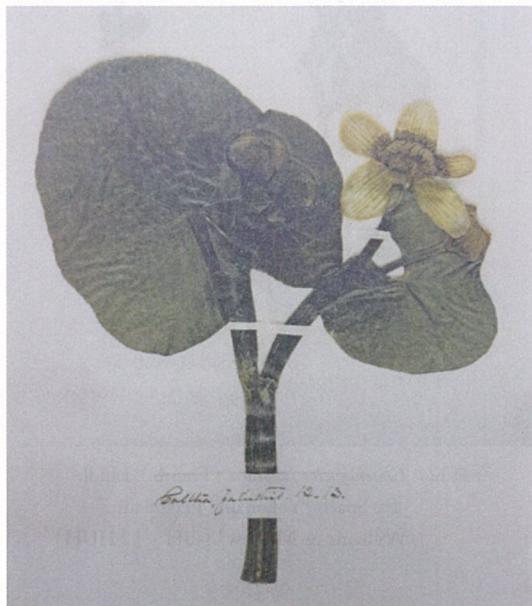


写真 8 *Caltha, palustris* (EDH 29) [seq. 32]



写真 9 *Caltha palustris* L. var. *nipponica* [Herbarium of the
Arnold Arboretum] [HUH]



写真10 “Japonica” (EDH 27) [seq. 30]

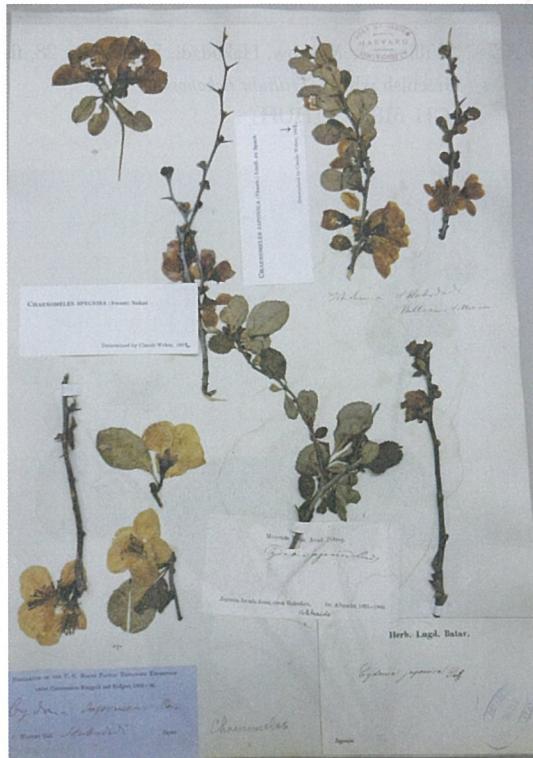


写真11 Chaenomeles speciosa / Japonica / Chaenomeles japonica / Cydonia japonica / Cydonia japonica [GH] [HUH]



写真12 *Chaenomeles japonica* (Thunb.) Lindl.
Ex Spach "Yokohama Hakodadi /
Williams & Morrow" [GH] [HUH]

(原稿受理日 2015年9月25日)